

認知症対応型共同生活介護 グループホームくつろぎ

1 基本方針

認知症になっても入居者一人ひとりが個人として尊重され、住み慣れた地域の中で築いてきた暮らしを大切にしながら、その人らしく生活できることを目指す。

2 利用者の状況（令和8年3月31日現在）

（1）入退所の状況

定 員		前年度末 利用者数	令和7年度中の入退所状況						利 用 延人員	年間平均 稼 働 率	年 度 末 利用者数
			入所	退所	退所理由別						
					家庭 復帰	施設 移管	難病 （院等）	死亡			
9人		9人	4人	4人	0人	0人	1人	3人	3,019人	91.90%	9人
6年度	9人	9人	2人	2人	0人	0人	1人	1人	3,181人	96.83%	9人

（2）利用者の介護度別人員

（3）性別	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	計
男性	0人	2人	1人	0人	0人	3人
女性	1人	1人	3人	1人	0人	6人
計	1人	3人	4人	1人	0人	9人

（平均介護度 2.56）

3 事業の実施状況

（1）専門的ケアの実施と個別支援

ア 年度当初、理念に基づき認知症支援の方向性を示した。研修では、認知症の人が語る言葉から行動の背景や症状の原因を理解し、日々の支援に活かす取り組みを実施した。

また、今年度より湖東地域包括支援センターが毎月開催する「認知症勉強会」に職員が1名ずつ参加し、職員会議にて復命研修を行う体制を整えた。さらに、鳥取市主催の認知症フォーラムにも参加し、認知症本人の声を聞き「認知症になっても自分らしく暮らし続けることができるまち」への取り組みに参加し、本人のつらさや苦勞、どのような支援が生きる自信に繋がるのか職員全体で考えるきっかけとした。

イ 認知症を有する人の意思決定支援の取り組みとして、意思決定支援の基本的な考え方「～誰もが私の主人公は、私～」という動画を参考に意思決定支援のポイントを研修しアセスメントやケア計画に反映させた。

ウ 表情（安心できる笑顔）や声のトーン、身体への触れ方など非言語コミュニケーションの活用を大切に、日々の支援やアセスメント情報から、一人ひとりのその瞬間の心理状態を観察、「褒める」ことで喜びの感情や自信に繋がる会話を心がけ、長年身に付けてきた習慣などから「できること」が継続する支援を基本とした。

趣味（手作業・読書）、食の準備（食材の確認、処理、切る、煮込む、器の準備、盛り付け、配膳）、片付け、掃除、人の助けなど「できる自信」を生活リハビリとして支援した。また、毎日の日課として足と手を動かした体操、四字熟語、ことわざ、鳥取市内の地名など肺活量や腹式呼吸を活用した大きな声を出す訓練、思い出しながら読み上げる記憶持続訓練、上下肢機能維持等筋力低下予防など頭と体の健康管理に努めた。

エ 介護度の重度化や認知症による混乱が見られる方について、主治医と連携し、生活のしづらさに関する情報の共有を行いながら、BPSDの軽減や生活しやすさに繋がる支援方法をその都度相談した。主治医の協力体制が確立されており、職員にとっても精神的な安心感につながる関係性が築けている。

オ 新入居者や課題解決の必要なケースは、課題分析シートの活用などデータを共有し個々の生活スタイルのサポートの検討を繰り返していった。火災報知機に執着のみられる方などの対応として、湖山消防と情報共有し、法的に問題のない安全カバーを設置する措置を図るなど地域との連携を図った。

(2) 職員の資質向上と人材育成

ア 認知症を有する人の意思決定支援の考え方（理念）から尊厳を大切にした姿勢、方法や配慮すべき点など支える側としての支援の在り方を研修で示した。

入居者ほとんどの方が自分の意思をそれぞれの方法で伝える事ができるため、聞く力や考え方を理解する力を養いケア計画に繋がるよう努めた。また、本人、家族のサービス担当者会議参加及びわかりやすい言葉での説明に努めた。

イ 看護・介護連携を図り、医療的ケアの質向上を目的として、外用薬・内服薬等の安全な使用方法について研修を行い、薬剤の適正使用に関する理解を深めた。また、身体機能の低下に応じた福祉用具の活用や、食事形態の変化に合わせた調理方法の工夫を行った。

ウ いつでも視聴できる動画視聴により知識や技術を学べる機会を設け、自己研鑽や職場研修として活用した。

(3) 地域社会との連携と認知症理解への取り組み

ア 運営推進会議を2ヶ月毎（4月・6月・8月・10月・12月・2月）に開催した。毎回、家族の参加があり、困難事例の情報を共有することで、行政や地域包括支援センターを含む委員とともに課題解決に向けた検討を行うことができた。その結果、運営推進会議が持つ役割を十分に発揮し、良い成果が得られた。

イ 毎月個々の活動情報（くつろぎでの様々な生活の様子）をフォト（A4サイズ）で家族へ送付し情報の共有を図った。家族との外出は制限なく要望に合わせて対応している。

（地域交流）

- ・2週間に1度移動スーパー「とくしまる」による買い物 ・移動図書館の活用
- ・末恒公民館祭へ作品出展 ・鳥取市湯所「最勝院」による法話交流会
- ・ミュージックケア ・歌・踊りボランティア ・コンビニ、スーパーへの買い物外出
- ・ハンドマッサージ ・赤ちゃん交流 ・コミュニケーションボランティア（学生）
- ・近隣施設（伏野つばさ園・総合センター）3施設との合同避難訓練
- ・県営住宅末恒第一団地 高齢者見守りサービス事業協力（102件緊急メール受信）

(4) 経営基盤の確立

ア 目標稼働率97%であったが、平均稼働率は91.90%と目標稼働率を下回った。長期の治療入院が続いたことで、退所から入所までに1～2か月を要するケースが発生したことが稼働率の低下の要因となった。

イ 火災・地震想定など3施設合同（伏野つばさ園、総合センター）避難訓練、緊急通報訓練、緊急時救急対応訓練等を実施し各災害に備えた。

(5) 労働環境の整備

ア 3か月に1回、生産性の向上委員会を開催し、福祉機器の活用状況の点検や課題抽出などの取り組みを継続している。また、月1回安全衛生委員会では、健康や労働環境について産業医の助言を受けながら、働きやすい職場環境づくりについて協議し、負担軽減に努めている。

(6) 実習、ボランティアの受入状況

ア ボランティアの受入実績

- ・法話1名（毎月）・ミュージックケア2名（毎月）
- ・コトモニ・歌のボランティア・湖山地区公民館踊りボランティア

（計：延べ 22人）

(7) 県営住宅末恒第一団地 高齢者見守りサービス事業協力

登録高齢者件数 7 件

4 月～3 月 緊急メール受信 102 件

・人感センサー異常 4 件 (サポーター住宅訪問なし、折り返し連絡で安全確認)

・血中酸素濃度異常 98 件 (サポーター住宅訪問なし、折り返し連絡で安全確認)

1 名：血中酸素濃度異常 79 回、人感センサー異常 1 回

1 名：血中酸素濃度異常 18 回、人感センサー異常 1 回

1 名：血中酸素濃度異常 1 回

1 名：人感センサー異常 2 回